

モーリン・アンド・マイク・マンフィールド財団ニュースレター

2021 年 1 月 28 日

エズラ・ボーゲル教授を偲んで

日本でも「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の著者で知られ、昨年 12 月 20 日に亡くなったエズラ・ボーゲル米ハーバード大学名誉教授の偲ぶ会が、同月 29 日(日本時間 30 日)、マンフィールド財団主催の[日米次世代パブリック・インテレクチュアル・プログラム](#)の参加者有志によってオンラインで行われた。生前、同プログラムの諮問委員を務めた故ボーゲル教授の偲ぶ会には、同プログラム参加者や諮問委員、運営スタッフが集まった。故人が日本研究や中国研究にいかにより優れていたかだけでなく、米国と日本その他アジア諸国とのよりよい関係構築に貢献し、また本プログラムを通じ、若手研究者の育成に努めたことなど、参加者は故人の穏やかで寛大な人柄に支えられた思い出を語り合った。

[財団のジャヌージ理事長の故ボーゲル教授への追悼メッセージ\(英語\)](#)

※なお、ハーバード大学、マンフィールド財団他共催で、日本時間 2 月 2 日午前 2 時より、ボーゲル教授の[オンライン追悼イベント](#)が開催される予定です。日本の朝早い時間になりますが、ご関心のある方は、登録の上ご参加ください。(本ニュースレター末にある今後のイベントのご案内)も合わせてご覧ください。)

イベント詳細: <https://programs.wcfia.harvard.edu/us-japan/event/vogel-in-memori-2-1-21>

登録リンク: https://harvard.zoom.us/meeting/register/tJ0qd-GsqjwjHNb02oJF_vd0iD1DxQL6oma

第 25 期マンフィールドフェローと G3P フェローによるネットワーキング会合

1 月 4 日(日本時間 5 日)、[マンフィールド・フェローシップ・プログラム](#)の第 25 期フェロー(2021 年夏に訪日予定)と [Global Government-to-Government Partnership](#)(以下、G3P)の日本人フェロー 2 名がオンラインでネットワーキング会合を開催した。G3P は人事院による行政官短期在外研究員制度の一環として米国国務省がメリディアン・インターナショナル・センター(ワシントン DC)協力のもと実施している。同プログラムでは、米国の連邦政府職員を日本の省庁等に派遣するマンフィールド・フェローシップとは反対に、日本の政府職員が米国連邦政府機関などに派遣され各自の課題について研究調査する。今回のネットワーキング会合では、双方が自身の所属機関や担当業務について説明し交流を深めた。

マンフィールド-PhRMA 研究者プログラム: 第 3 回オンライン・セミナー開催

1 月 15 日、マンフィールド財団は、米国研究製薬工業協会(PhRMA)の支援を受けて実施している[マンフィールド-PhRMA 研究者プログラム](#)の一環として、同窓スカラールを対象としたセミナーをオンラインで開催した。第 3 回目となる今回は、米国国立衛生研究所(NIH)傘下にある国立

先進トランスレーショナル科学センター(NCATS)の[ジョニ・ラター博士](#)をゲストスピーカーに迎え、同窓スカラーはトランスレーショナル・リサーチの概要やコロナ禍での現状等について議論を行った。

日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワークプログラム：第2回内部セミナー実施

1月20日(日本時間21日)、[日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク・プログラム](#)第5期参加者による第2回内部オンライン・セミナーを実施した。今回はコロラド大学ボルダー校人文化類学部准教授のキャスリン・ゴールドファーブ博士が日本の児童養護施設の課題点について、またニューヨーク州立大学ジェネセオ校政治学・国際関係助教授のアナンド・ラオ博士が現在の日韓関係についてそれぞれの研究や考察の要点を発表するとともに、他の参加者や諮問委員から、今後プログラム成果としての署名入り記事(Op-Ed)やポリシーペーパーにまとめるための助言やコメントを受けた。

[第5期参加者のプロフィール](#)

マンフィールド財団プログラム関係者によるオンライン新年会を開催

1月26日(日本時間27日)マンフィールド財団は、財団のサポーター及びプログラム関係者らを招き、初のオンライン新年会を開催した。プログラム関係者約60名が集い、フランク・ジャヌージ理事長による冒頭挨拶の後、「[コーポレート・フレンズ・オブ・マンフィールド会員](#)」、「マンフィールドフェロー」、日米次世代パブリック・インテレクチュアル・プログラム等の「専門家プログラム参加者」のブレイクアウト・グループに分かれ、自己紹介や近況報告を行うなど通常のバーチャルセミナー等では得られない交流が和やかに行われた。

日本国際協力センター(JICE)：カケハシ・プロジェクトのオンライン同窓会を開催

1月15日、マンフィールド財団が外務省より運営を委託されている[対日理解促進交流プログラム「カケハシ・プロジェクト」\(米国\)](#)の実施機関である[日本国際協力センター\(JICE\)](#)が「カケハシ・プロジェクト オンライン同窓会」を開催した。ネットワーキングの活性化を目的に日本及び米国、カナダの同窓生146名と関係者が集った。同窓生代表3名がプレゼンテーションを行い、カケハシ・プロジェクトでの経験がその後の人生にどう影響を与え、現在どのような活動をしているのかを発表した。また、参加者は小グループに分かれ、カケハシ・プロジェクトの経験を共有するとともに、「コロナ時代において国際的友好を深めるためのカケハシ同窓生の役割」について意見交換し、同窓会活動や国際交流への意欲を新たにした。本会合では、マンフィールド財団のフランク・ジャヌージ理事長が挨拶の辞を述べ、自身が学生の時に参加した国際交流プログラムの経験を振り返りながら、そのような経験がいかに特別で将来長きにわたって影響力を持つ貴重なものかについて語り、若い参加者たちにエールを送った。



◆日本経済協議会主催のオンライン対談にジャヌージ理事長登壇

1月18日(日本時間19日)に、[日本経済協議会\(JUBC\)](#)がバイデン政権の外交をテーマに会員向けに開催したオンライン対談に、マンスフィールド財団のフランク・ジャヌージ理事長が東京大学未来ビジョン研究センターの藤原帰一教授とともに登壇した。モデレーターは、NHKワールドTVのシニア・ディレクターの道傳愛子氏が務めた。

◆アトランティック・カウンシルの「グローバル・エネルギー・フォーラム」にベン・セルフ副理事長登壇

1月19日(米国時間)、マンスフィールド財団の[ベンジャミン・セルフ](#)副理事長が、米シンクタンクであるアトランティック・カウンシルの「[グローバル・エネルギー・フォーラム](#)」([外部サイト・英語](#))(1月19日-22日開催)にスピーカーとして登壇した。

<今後のイベントのご案内>

◆米国大使館主催オンライン講演会:「バイデン政権下のアジアにおける米国の持続的的利益」(1月29日)

マンスフィールド財団ジャヌージ理事長、スピーカーとして登壇

1月29日(金曜日)午前10時-11時30分にアメリカ大使館主催で行われるオンライン講演会、「[バイデン政権下のアジアにおける米国の持続的利益\(Enduring U.S. Interests in Asia under the Biden Administration\)](#)」に、弊財団の[フランク・ジャヌージ理事長](#)が講師としてお話しさせていただきます。ご関心のある方はどうぞご参加下さい。なお、弊財団主催のイベントではございませんので、詳細・お申込みについては、[アメリカンセンターJapanのウェブサイト](#)をご参照下さい。(参加無料、同時通訳あり)

◆エズラ・ボーゲル教授追悼イベント(2月2日):

ハーバード大学ライシャワー日本研究所、ボストン日米協会、ニューヨーク日米協会、モーリー・アン・アンド・マイク・マンスフィールド財団共催

日時: 日本時間 2月2日(火曜日)午前2時-3時30分、米国東部標準時間 2月1日(月曜)

日)午後 12 時-1 時 30 分

イベント: 追悼イベント「日米関係におけるエズラ・ボーゲル、不朽の遺産」(In Memoriam: “Ezra Vogel in U.S.-Japan Relations: Enduring Legacies”)

詳細: <https://programs.wcfia.harvard.edu/us-japan/event/vogel-in-memoriam-2-1-21>

登録リンク: https://harvard.zoom.us/meeting/register/tJ0qd-GsqjwjHNb02oJF_-vd0iD1DxQL6oma

日本の朝早い時間になりますが、ご関心がある方は、上記のリンクからご登録の上ご参加ください。

スピーカー:

[グレン・S・フクシマ](#)(アメリカ進歩センター・シニアフェロー、元米国通商代表補代理、元在日米国商工会議所会長)

[ジョセフ・S・ナイ](#)(ハーバード大学ケネディスクール・名誉教授)

[スーザン・ファー](#)(ハーバード大学教授(日本政治)及び日米関係プログラム・シニアアドバイザー)

[ステイブ・ボーゲル](#)(カリフォルニア大学バークレー校教授(政治学))

モデレーター:

[クリスティーナ・デビス](#)(ハーバード大学教授(政治学)及び日米関係プログラム・ディレクター)

言語: 英語

<財団関連の記事や報道のご紹介>

◆毎日新聞: ジャヌージ理事長インタビューが掲載されました。

毎日新聞(1月13日付)に「[どう動く・バイデン外交 米朝・南北協議、両輪で 米マンスフィールド財団理事長 フランク・ジャヌージ氏](#)」の記事で弊財団のジャヌージ理事長のインタビューが掲載されました。(なお、この記事後半は有料となっておりますのでご了承ください。)

◆NHK「おはよう日本」: ジャヌージ理事長インタビューが放送されました

NHK ニュース「おはよう日本」(1月6日放送)で、弊財団のジャヌージ理事長がインタビューを受け、放送されました。

マンスフィールド・フェロースhip・プログラム日本在住同窓生近況報告

English follows Japanese

●ローガン・バーロウ少佐(Major Logan Barlow) 第23期マンスフィールドフェロー(2018年-2019年)

米国空軍嘉手納基地第18運用群 官房員、空中給油機 教官パイロット



私は現在、日本の沖縄にある嘉手納空軍基地 18 運用群の官房員を務めています。第 18 部隊は米国空軍最大の戦闘作戦部隊で、9 つの飛行隊と 3 つのテナント部隊から構成されています。そこでの我々のミッションは、全空域における作戦をいつでも、どこでも実行するというものです。沖縄は、太平洋地域の要であり、インド太平洋での米国の国家安全保障の目的における重要な戦略的役割を担っており、安全保障に対して増大する地域の敵対勢力からの脅威に対抗し続けるために極めて重要な場所です。官房員としての私の役目は、作戦部隊司令官のために管理・人事分野の側面から支援をすることです。軍の作戦及び首尾一貫とした二国間パートナーへの関与の性質上、私は、自分の日本文化と日本語への専門知識を使って支援することもしばしばあります。

最近、二国軍事演習のため、我々の部隊の一つが本州に派遣されました。感染拡大最中の時期であるということを除けば、これは単に通常の作戦でした。しかしながら、米軍に対してあまり好意的でない報道や正確性を欠いた情報のため、演習先となった県政や市政レベルで、米国空軍の存在に対する居心地の悪さを感じることとなりました。沖縄、特に嘉手納空軍基地における新型コロナウイルス感染者数に関する誤報には、ひどくうらたえさせられました。作戦部隊司令官は、通常、本部から指示を送り、こうした軍事演習に参加したり、視察したりすることはしませんが、米軍の存在に対しての市民からの抗議や反対の増大に伴い、司令官は現地に赴くことを決め、私も官房員、補佐、言語・文化専門家として、司令官の随行を命じられました。現地訪問中、私がマンスフィールドフェローとして築き上げたご縁を活用することができました。実は訪問先の航空自衛隊の駐屯地には、マンスフィールドフェロー時代に視察し、指導層とお会いしたことがあったのです。これが、米国空軍と航空自衛隊の連絡調整を生かす重要な機会を生み出し、最終的には、良好な関係の構築と、米国海軍のパイロットやメンテナンス・スタッフの存在による不安から増大した不満を鎮める一助となりました。これはマンスフィールドフェロー時代に私が得た経験の直接的インパクトと思っていますが、マンスフィールド大使がおっしゃられた「日米関係を維持するために、荒れ狂い、予測できない世界にこの同盟関係を進めていく人々への継続した投資が必要である」という信条の具現であるとも感じました。

さらに、私のところには、多くの有望なマンスフィールドフェロー志望者が申請書や面接準備の助言のために連絡をとってきます。これは私にとって、フェローとして過ごした日々を振り返る大事な機会になっています。私のキャリアの中で最も輝かしい時期の一つであり、米国空軍の将校としての私の成長に大きな影響を与えました。マンスフィールド財団が与えてくれたこの機会への感謝が日々膨らんでいきます。マンスフィールドフェローに選ばれたのは大変名誉なことで、フェローとしての経験は、今後も重要な配当として私の糧になっていくだけでなく、今後の日米関係の強化に間違いなく貢献しています。そして、日米関係こそが、「まさに、世界における最も重要な二国関係」*なのです。

※故マイク・マンズフィールド大使の言葉 (“most important bilateral relationship in the world... BAR NONE!”)

Major Logan Barlow (MFP23, 2018–2019)

18th Operations Group Executive Officer, KC-135 Instructor Pilot; Kadena Air Base, Okinawa

I am currently assigned as an executive officer in the 18th Operations Group at Kadena Air Base Japan. The 18th Operations Group is the US Air Force’s largest combat operations group consisting of 9 operational squadrons and 3 tenant units where our mission is to execute full spectrum air operations, anytime, anywhere. Okinawa is the “Keystone” to the Pacific and plays a significant strategic role in the United States’ national security objectives in the Indo-Pacific Region and is vital to continuing to offset growing security threats from regional adversaries. In my role as an executive officer, I support the Operations Group Commander with administrative and personnel matters. Due to the nature of our operations and consistent engagement with our bi-lateral partners, both on island and located in Japan’s southwest defense sector, I often aide with cultural and language expertise as well.

Recently, one of our units deployed to mainland for a bi-lateral exercise. In any other instance, except for the middle of a pandemic, this would be a standard operation. However, in large part due to some unfavorable media coverage and a lack of accurate information, both the prefectural government and local city level government at the exercise location felt uneasy about having the USAF members. The misinformation with regards to number of COVID19 cases both on Okinawa and specifically at Kadena Air Base created quite the consternation. Oftentimes, the Operations Group Commander does not attend or visit these exercises, but directs from home station. However, given the increase in public protest and relative disaccord with regard to our presence, he elected to travel. I was asked to travel with him as both his executive officer, aide, and language and cultural expert. During our travels, I was able to capitalize on the relationships and connections I had established during my time as a Fellow. I had conducted a site visit to this very JASDF base and had met with base leadership as a Fellow. This afforded a significant opportunity to capitalize on USAF and JASDF coordination and integration, ultimately helping to establish and grow positive relationships and quell the growing rumblings of discomfort with having USAF pilots and maintenance personnel present. I felt like this was a direct impact of opportunities afforded to me while I was a Mansfield Fellow, but also a testament to what Ambassador Mansfield articulated, “Sustaining the U.S. partnership with Japan will require continued investment in the people who will carry this alliance forward in a turbulent and unpredictable world.”

Additionally, I have had many prospective Mansfield Fellows reach out to me for advice on applications as well as preparation for interviews. This has provided a significant opportunity to be introspective of my time as a Fellow. It has been by far one of the most cherished moments of my career and has been highly impactful on my development as an officer in the United States Air Force. Each day I grow more grateful for the opportunities that I was afforded by the Foundation. I have been privileged to have been a Mansfield Fellow. I have will no doubt the Fellowship experience will continue to provide significant dividends for myself as well as for the continued strengthening of the US-Japan relationship, the “most important bilateral relationship in the world…BAR NONE!”

[モーリーン・アンド・マイク・マンズフィールド財団 日本語ホームページ](#)



**THE MAUREEN AND
MIKE MANSFIELD FOUNDATION**

Connecting People and Ideas to Advance Mutual Interests in U.S.-Asia Relations



[Facebook](#)

[Twitter](#)

[Email](#)

[Support](#)